



# 地域振興の拠点施設として 定着する道の駅



ひぐち ひさとし  
**樋口 久俊**  
かしま  
鹿島市長(佐賀県)



みしま のりもと  
**三島 紀元**  
かさおか  
笠岡市長(岡山県)



ささき としのり  
**佐々木 稔納**  
なんたん  
南丹市長(京都府)



あらい としあき  
**新井 利明**  
ふじおか  
藤岡市長(群馬県)

司会・コーディネーター

ほその すけひろ

**細野 助博**

中央大学総合政策学部教授

休憩施設と地域振興施設が一体となった「道の駅」。1993年に初めて誕生してから約20年が経過した現在、国土交通省により登録され、市町村が設置した道の駅は全国に1000カ所以上に及びます。24時間利用可能な駐車場やトイレのほか、物産館や産直などの施設を併設するなど、観光客が集まる交流拠点となっています。近年では地域住民に利用される道の駅も多くなり、防災や福祉の拠点としても注目を集めています。

座談会では道の駅を設置し、地域振興に活かす新井・藤岡市長、佐々木・南丹市長、三島・笠岡市長、樋口・鹿島市長にご出席いただき、各道の駅の特徴、地域全体への波及効果、ほかの施設との連携など、幅広くお話しいただきました。(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

道の駅を訪れる  
年間250万人もの方々の  
ニーズに応えることが必要。  
今後は海産物の販売も  
していきたいです。



新井 利明  
藤岡市長(群馬県)

**観光振興から「コミュニティの拠点まで  
さまざまな機能を持つ「道の駅」**

**細野** 道の駅が誕生して、既に20年以上が経過していますが、近年は一般道における、24時間利用可能な休憩施設としてだけでなく、農産物直売所やレストラン、温泉施設なども併設した道の駅が増えていますね。交流人口の拡大にもつながる、観光振興拠点として脚光を浴びるよ

うになりました。さらに、東日本大震災以降は特に、災害拠点としても注目を集めています。それでは、各都市の道の駅の歴史、サービスの特徴などについてお話しください。

**新井** 本市の「道の駅ふじおか」が国土交通省に登録され、開駅したのは2000年4月のことでした。上信越自動車道藤岡PAに併設し、高速道路からも一般道からもアクセスできる利便性を生かし、年間の来場者数は市民を含めて250万人前後、「関東好き」な道の駅ランキングで2009年から2014年まで連続1位に輝くなど、人気スポットになっています。

施設内には野菜や加工品など、品質の高い農産物を販売する農産物直売所も設置。市内の農家、菜園家で生産者組合を組織し、午前と午後1日2回体制で商品を提供しています。ちなみに、この農産物直売所はもとより、観光物産館、テナントなども地元地域を優先。市内から業者を公募するなど、地域の経済効果を重視しています。加えて、観覧車や遊具、さらには夏場には水遊びができる噴水、小川を設けるなど、子どもたちも楽しめる憩いの場としても好評です。

藤岡市には昨年度、世界遺産に登録された「富岡製糸場と絹産業遺産群」の一つで、国指定史跡でもある「高山社跡」や、近くに桜の名所もあり、体験工房なども楽しめる「体験学習館MAG(マグ)」をはじめ、さまざまな観光資源を有しています。今後は「道の駅ふじおか」を観光拠点として、そのハブ機能を強化しながら、各施設との連携を図り、観光による地域振興の推進、交流人口の拡大につなげていきたいと考えています。

**佐々木** 平成18年に4町が合併して誕生した南丹市では、「京都新光悦村」「美山ふれあい広場」

「スプリングスひよし」の3つの道の駅が営業を行っています。旧町時代に設置したもののだけでなく、合併後に新たに登録された駅も含めて、各施設とも歴史や特色はそれぞれですが、いずれも地域の活性化、観光振興に貢献しています。

中でもユニークなのが、かやぶきの里として知られる「美山地区」に設置されている道の駅「美山ふれあい広場」です。観光客へのサービスだけでなく、道の駅をコミュニティの拠点に位置付けながら、周辺の郵便局、診療所、保健福祉センター、行政窓口なども連携し、住民の生活を支える各種サービスを提供するなど、国土交通省が進める「小さな拠点」づくりの具体的事例としても、注目を集めています。

さらに、3つの道の駅が連携し、共に地域振興に貢献するための仕組みとして「南丹市道の駅連絡協議会」を結成していることも特徴の一つです。それぞれの道の駅が力を結集しながら、商品開発やイベントの企画などを進めています。



平成25年には、南丹市だけでなく、亀岡市、京丹波町を含む京都丹波地域(京都中部地域)の7つの道の駅と京都府南丹広域振興局が連携して、地元特産品を生かした7種類の弁当「七彩弁当」を開発し、各道の駅で売り出すなど、具体的な成

果も上がっています。

**三島** 笠岡市は平成23年、国道2号線バイパス沿いに「道の駅笠岡ベイファーム」を開駅しました。国直轄事業として平成2年に完全竣工した、1811haもの広大な笠岡湾干拓地内にある道の駅です。当初は国道2号線から若干離れていることもあり、年間の入込客数を約14万人と予測していましたが、実際のところはおよそ88万人。予想以上の来場者、売り上げに驚きました。が、今でもその勢いは衰えず、今年の3月には来場者300万人を突破するまでに至りました。

特徴の一つは、効率的で高度なサービスを提供するために、PFI手法を導入していることです。笠岡の農産品・笠岡諸島の水産物や土産物などを販売する直売所も備えています。が、開業に当たっては、駅長自ら他県で研修し、水産物の管理や販売ノウハウを習得。スーパーとは一味違った対面販売を売りにしているほか、魚の詰め放題などユニークなサービスも人気を集めています。

PFIを導入すると、業務の一切を運営事業者に丸投げする自治体もあるようですが、われわれは毎月、運営事業者と販売や管理の方法、バイキングレストランのメニューについて協議を行うなど、積極的にコミュニケーションを図っています。

また、市としても駅開業に合わせて、12haもの花畑を整備したところ、人気スポットとして定着、道の駅に来場者の増加につながっています。今後も運営事業者と連携し、互いに知恵を出し合いながら、さらなる活性化に向けて努力していきたいと思っています。

**樋口** 佐賀県第1号として、有明海沿岸に「道

の駅鹿島」が国土交通省に登録されたのは平成6年のことです。現在、この道の駅を舞台に、有明海の干潟を活用したさまざまなイベント、まちづくりが展開していますが、そもそもこうした取り組みは、道の駅の登録以前から行ってきたものでした。

実際、現在の道の駅の主要施設である「干潟展望館」、農林水産物直売所「千菜市」は登録以

観光客へのサービスはもとより、道の駅をコミュニティの拠点と位置付け、住民の生活を支える取り組みもさらに進めていきたいと思っています。



佐々木 稔納  
南丹市長(京都府)

前から営業を行っていましたし、昭和60年には有明海の干潟を活用した一大イベント「鹿島ガタリンピック」を開催、平成4年からは体験型観光企画として「干潟体験」を始めています。

加えて、近年は平成20年に農林水産省の「立ち上がる農山漁村」に選定されたほか、平成25年には本市を舞台に、全国「道の駅」連絡会総会（全国「道の駅」シンポジウムin鹿島）を開催するなど、全国的に知名度も向上。地域の中に、「自分たちもやればできる」という機運や元気が生まれています。

これまでを振り返って、つくづく感じるのは、われわれの道の駅は、登録以前の時代も含めて、徐々に進化させてきた歴史を持っているということ。必要に応じて新たな機能を、いい意味で継ぎ足しすることで、観光客はもとより、住民からも喜ばれる道の駅になりました。

その一方で、開設以来、当初からぶれずにこだわってきたのは地元の商品しか販売しないこと。販売量には限りがありますが、豊かな有明海のユニークな海産物が購入できるとあって、お客さまからも支持を集めています。

### 中心市街地商店街との共存の在り方

**細野** 現在、全国的に中心市街地の衰退が進む中で、いかにこれを活性化させるか、多くの自治体が頭を悩ませていると思います。その観点から、道の駅と中心市街地商店街の共存関係の在り方についても、ご意見をお聞かせいただきたいと思っています。

**佐々木** 南丹市においても、大型スーパーなどの影響で、中心市街地の衰退は確実に進んでいます。実のところ、中心市街地から2km程度離

れた場所に、道の駅を開駅する際には、商店街に対する影響を懸念する向きもありました。

ただ、実際のところは、杞憂<sup>きゆう</sup>でした。むしろ適切な共存関係を築くことができています。商店街の関係者の中にも、新たな販売チャネルとして、道の駅に商品を納めて、売上を上げている方もいらっしゃいます。

**三島** 笠岡市でも同じようなメリットがあります。中心市街地商店街でお店を閉められた方から、道の駅に商品を納めたいという相談が持ち込まれていると報告を受けています。

**樋口** 鹿島市では、平成25年に、中心市街地の商業ビルの空きフロア（3階、4階部分）を市が買い取って、常設の子育て支援施設と高齢者福祉施設を整備しました。民間の商業ビルの中に、市の公的施設を配置する例は、全国的にも珍しいと思います。こうした施設を訪れる人が増えたことで、ビル全体がにぎわいを取り戻しています。

すると、この集客効果を生かそうと、ビルの1階のフロアで、ある食品スーパーが営業を始めることになりました。かつてこのビルではほかのスーパーが営業を行っていたものの、市街地の衰退に伴い、撤退した経緯がありましたから、われわれにとつて、ことのほかうれしいニュースとなりました。事実、道の駅の直売所を出している有機野菜をこのスーパーでも販売するなど、いい意味で共存が図られていると感じています。

**新井** 藤岡市の場合、中心市街地と道の駅は距離が離れているので、ほとんど影響は出ていないと思います。とはいえ、本市でも中心市街地は衰退が進む一方で、活性化は大きな課題となっています。

行政としては地域のスーパーの経営にも配慮し、商圈や顧客層は、既存のスーパーとの競合を避ける努力も必要です。



三島 紀元  
笠岡市長(岡山県)

現在は、商工会議所を中心に、行政も連携しながら活性化策を進めています。商店街関係者も従来以上に努力することが必要だと感じています。中心市街地活性化法なども整備され、市町村の役割が大きくなるにつれて、行政が何かしてくれるのではといった期待感が出てきているのかもしれませんが、当事者自身のより主体的な姿勢を期待しているところです。

**三島** 市として配慮しなければいけないのは、

中心市街地商店街だけではありません。地域のスーパーの売上や経営への影響にも注意する必要があります。その意味でも、商圈などを設定した事業計画を広く共有すること、さらには来客する顧客層については、市内のスーパーと競合しないように努力することも大切です。現に、その観点から、道の駅では「新鮮さ」をアピールポイントに設定し、隣接する広島県福山市のお客さまをターゲットに営業するなどしています。

**佐々木** 少し論点を異にしますが、特に農山村地域に道の駅を設置する場合、特産品を販売するだけでなく、コミュニティの拠点として、住民の生活を支える機能も必要になります。本市でも、撤退したJA店舗の代替として、住民出資の会社で運営する小売店が道の駅に発展したケースもあります。

事実、この道の駅では、生活用品も取り揃えて販売するなど、住民の暮らしに欠かせない存在となっています。過疎化が進む中では、こうしたニーズに応えていくことも極めて重要だと思います。

**樋口** 私も道の駅は、住民サービス、住民福祉という面からも重要な施設だと認識しています。「道の駅鹿島」では平成24年から、主に高齢者などを対象に、買い物弱者対策として、宅配サービスを始めましたが、住民から大変喜ばれています。

### 駐車場をいかに確保するか

**細野** 道の駅を訪れる際には、自動車を使うことが一般的でしょう。来場者を増やすためには、十分な広さの駐車場を整備することが不可欠でしょうが、用地確保などの面での苦労や工夫



樋口 久俊  
鹿島市長(佐賀県)

必要に応じて新たな機能を  
継ぎ足しすることで、  
観光客や住民から喜ばれる  
「道の駅」に進化させる  
ことができました。

されている点はありませんか。

**新井** 現在、「道の駅ふじおか」は年間、およそ250万人の方が利用されていますが、さらにこの数を増やすためには、やはり駐車場を広げる必要があります。ただ、もはや十分な用地を確保することはできません。高速バスの停留所などを移転できないか、模索しているところです。

**三島** 笠岡市も、当初の見込みを大幅に上回る

来場者に対応するため、常に駐車場の確保に頭を悩ませています。現状では大型車が11台、普通車は31台しかとめられません。特に、市が整備した花畑のシーズンには多くの人が訪れますから、臨時駐車場を整備する必要がありますが、これが一苦勞です。一帯は農業用干拓地のため、国、県と相談しながら、農地の一時転用という形で対応しているのですが、法規制が厳しく、毎回、手続きを踏まなければいけません。

**新井** 農地転用は極めて難しい問題ですね。われわれ自治体は決して乱開発しようと考えているわけではない。実情に応じて、必要な土地利用を行いたいだけに、法規制が大きな壁となつて、なかなか思い通りにいきません。近年ようやく、国も重い腰を上げて、農地転用権限の地方への移譲を決定しましたが、私からすれば10年は遅いというのが率直なところですね。

**佐々木** 南丹市の道の駅には、食事提供コーナー、地域産品販売コーナーなどの「地域振興施設」は市が設置し、駐車場やトイレなどは国が設置する形で整備を進めた駅もあります。今後を考えると、駐車場も含めて、これまでの役割分担に応じて、国や府県が新たな整備に協力してくれるのか、私としても大きな関心事です。  
**細野** 特に近年は道の駅の機能が増えて、災害時の防災拠点としても注目が集まるようになってきます。なおさら、充実した設備が必要になりますね。

**佐々木** 本来なら、大災害が発生した場合、道路利用者に対し、道路情報、避難情報など、的確な情報を適宜提供すべきでしょうが、現状では、情報の集約、提供について、統一的なルールが定められていません。災害拠点として機能

させるためにも、そうしたシステム構築、サービス提供の重要性について、国や府県にもアピールしていきたいと考えています。

**新井** 群馬県内でも県と道の駅の間で、「道の駅」の防災総合利用に関する基本協定」を締結していますが、県内はもとより、首都圏で大規模災害が発生した場合に、われわれのような首都圏近郊の自治体がどのようにカバーしていくか、考えるべき時代に来ていると思います。

**細野** 道の駅が一定の集客効果、にぎわいの創出に貢献していることが分かりましたが、まち全体の活性化という視点では、ほかの施設との連携も重要になってきますね。

**樋口** その通りです。鹿島市では昨年、六次産業化の促進を目的に、鹿島市産業活性化施設「海道(みち)しるべ」をオープンさせました。農産物の加工や、商品開発の拠点として、最新鋭の加工機械なども導入したほか、佐賀県の東京事務所に派遣している市役所職員とも連携し、首都圏など販路開拓に向けた営業にも取り組んでいます。



さらに、この3月には、鹿島市の農林水産品や加工食品、お菓子などの「食」を、鹿島の統一したブランド「かしまデリカテッセン」としてまとめあげ、市内外にPRする取り組みもスタートさせまし



細野 助博  
(中央大学総合政策学部教授)

た。農家のご婦人方も意欲的に加工品づくりなどに参加されています。将来的には道の駅と一体化し、より効果的に取り組みを進めていきたいと考えています。

**三島** 笠岡市でも、道の駅の直売所ができたおかげで、農業生産者が元気になっています。また、われわれも、道の駅近くに整備した菜の花畑からはちみつを採集し、商品化するなど、六次産業の取り組みを行っています。今後は行政としても直売所に商品を納入する出荷者協議会とも連携し、六次産業化の仲立ち役も担えればと考えているところです。

### これからの道の駅を展望する

**細野** それでは最後に、今後の展望や方向性についてお話しください。

**佐々木** 近年、南丹市の美山地区を訪れる台湾の個人観光客が増えています。どうして海外の方が美山の存在を知ったのかというと、ブログからの情報なんです。その意味でも、情報発信機能は極めて大切です。本市を訪れた人がその場で情報を発信したり、受信できるように、南

丹市では国の支援を受けて、Wi-Fi(無線LAN)によるインターネット接続が利用できる機器を市内各所に設置することになっています。

**新井** 道の駅を訪れる年間250万人もの方々が何を求めているのかを把握し、そのニーズに積極的に応えることも必要です。そう考えると、藤岡市は内陸の地域であるため、従来は取り扱ってこなかった海産物の販売も重要になると思います。

**三島** 道の駅の位置付けをより明確にすることも必要です。本市の場合、観光客が最初に訪れるゲートウェイとして、ここから島を巡ったり、美術館を訪れたりといったように、着地型観光の受け入れ基地としてこれまで以上に機能させたいですね。

**樋口** 鹿島市には「新幹線が通らない」「高速道路が来ない」「有明海の汚染」「建築資材の高騰」「平成の合併を行っていない」という5つの壁が存在しています。これ乗り越えるためにも、極めて強い市民の結束力と、まちの強みを生かすことだと考えています。特に、まちの強みを生かすということでは、近年は急峻な山、そして、有明海を望む沿岸の平坦な道路などの地形をアピールすることで、箱根駅伝の強豪校が合宿を行うようになりましたし、有明海の干潟が国際的に重要な湿地を保全する「ラムサール条約」の登録に向けて取り組みなど、市の魅力の発信に力を注いでいます。同時に、国土交通省から「重点道の駅」に、そして日本政府観光局から「外国人観光案内所」にも認定されましたので、これを機に一層、道の駅を観光振興に結び付けていきたいと思えます。

**細野** 交流人口と定住人口をいかに組み合わせ

て、まちの活性化につなげるか、これは全国の都市の共通した課題の一つです。本日は、その解決のための手段として、道の駅の活用の方について、ご意見を交わしていただきました。道の駅と中心市街地の共存、コミュニティの拠点としての活用、ほかの施設との連携、災害にも対応するハード整備の必要性など、観光振興に限らず、幅広い観点から貴重なご意見をいただきました。ありがとうございます。

今後とも、市民や関係者と手を携え、地域振興の拠点として、道の駅を十分にご活用いただきたいと思えます。本日はどうもありがとうございました。

(平成27年4月7日、全国都市会館にて開催)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は7月号に掲載予定です。



